

今からでも間に合う！

キュウリの 遅まき栽培法

キュウリの露地栽培といえば、春からのスタートが一般的ですが、6月からの栽培も可能です。時期をずらして長い期間収穫を楽しみたいと考えている方には、ぜひ遅まき栽培をおすすめします。

もりや あきお
森屋 昭男

農業法人「三鷹ファーム」
(東京都三鷹市) 取締役。
三鷹市で代々続くプロ農家
として野菜を生産・販売。
地元農業の発展を見据え、
市民参加型のイベントや地
域交流事業にも力を入れて
いる。



涼しくなる秋にかけて
おいしいキュウリを収穫！

遅まきキュウリ栽培の
メリットは？

キュウリは収穫期間が短く、春植のものとは、7月末にはほぼ収穫が終わってしまいます。しかし春植えキュウリの収穫が続いている6月中に、新たにタネをまいておくと、秋口までリレー式においしいキュウリを楽しむことができます。

キュウリは低温に弱く、発芽には25〜30℃の地温が必要ですが、この時期は気温が高いため加温(温床)は不要。初心者でも無理なく育てられます。秋からは気温が徐々に下がり、生長もゆっくりになるので、長い期間収穫が楽しめるのもメリットです。

遅まき栽培のポイント

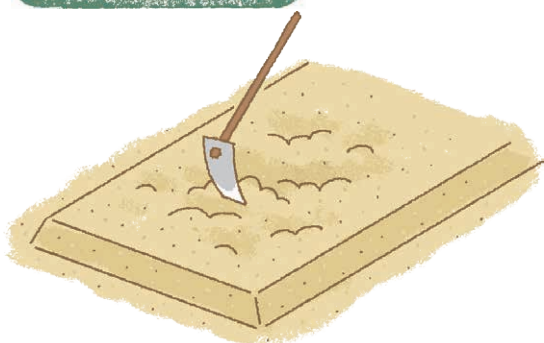
1 畑の準備 (図1)

春に苦土石灰をまいていない場合は、1㎡当たり100〜150gをまき、よく耕します。1週間後、元肥を入れてよく耕します。標準の元肥は、1㎡当たり完熟堆肥約2kg、チッソ、リン酸、カリの割合が各8%の化成肥料30〜50g、油かす70〜80gですが、前作の状況に合わせて調整します。気温の上昇に伴い、肥料の効きがよくなるので、元肥は入れすぎないようにします。ベッド幅約130cmの畝を作り、マルチを張ります。マルチは、地温の上がりすぎを防ぐシルバーマルチがおすすめです。

【図1】畑の準備

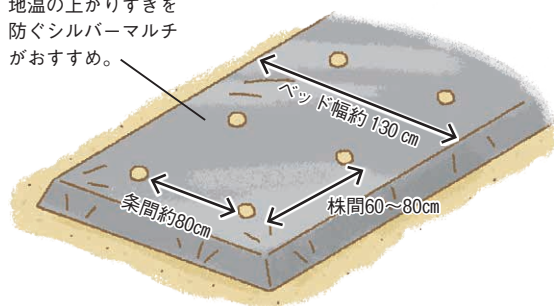
元肥 (1㎡あたり)

- ◆完熟堆肥約2kg
- ◆チッソ、リン酸、カリの割合が各8%の化成肥料30〜50g
- ◆油かす70〜80g



元肥を全面に施し、クワでよく耕す。

地温の上がりすぎを防ぐシルバーマルチがおすすめです。

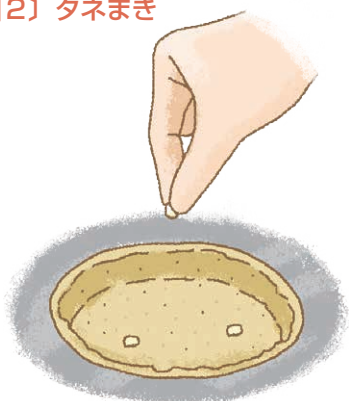


2 タネまき (図2)

日中の気温が高い時期の栽培になるので、苗を植え付けても高温で葉や茎が傷み、根の活着もしづらいので、直まきがおすすです。この時期からの栽培は、病気に強く生育旺盛な、VR夏すずみ^{フサ}、歯切れのよい四葉系の、シャキット^{フサ}などが向いています。

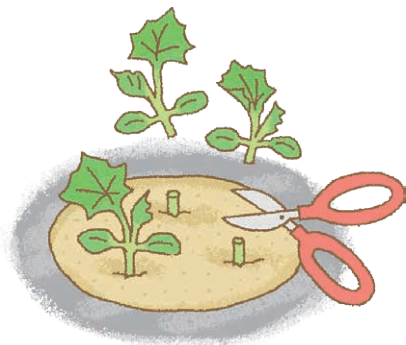
マルチ穴あけ器などで株間60〜80cm、条間約80cmのまき穴をあけます。各穴に2〜3粒ずつタネをまき、しつかり水を与え、発芽までは乾燥させないよう注意します。

図2 タネまき



1穴に2〜3粒のタネをまく。

図3 間引き



各穴1株に間引く。

3 間引き (図3)

本葉1〜2枚のころ、茎が太くてがつしりし、葉の形が整っている株を1本残し、ほかを間引きします。力まかせに引き抜くと残す株の根を傷めるので、地際からハサミで切り取ります。

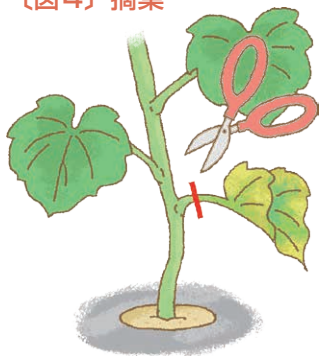
4 支柱立て、誘引

キュウリはつるが長く伸びるので、間引き後、つるが本格的に伸びる前に支柱を立てます。秋口は台風のため来が多くになるので、支柱は丈夫な合掌仕立てがおすすです。さらに園芸用ネットを張ると、巻きひげがネットに絡まり、強風であおられにくくなります。生育初期は巻きひげが伸びないので、ひもなどで誘引します。



株元が繁茂すると病気になりやすいので、すっきりさせることがポイント。

図4 摘葉



黄色くなっている下葉は、ハサミで切り取る。

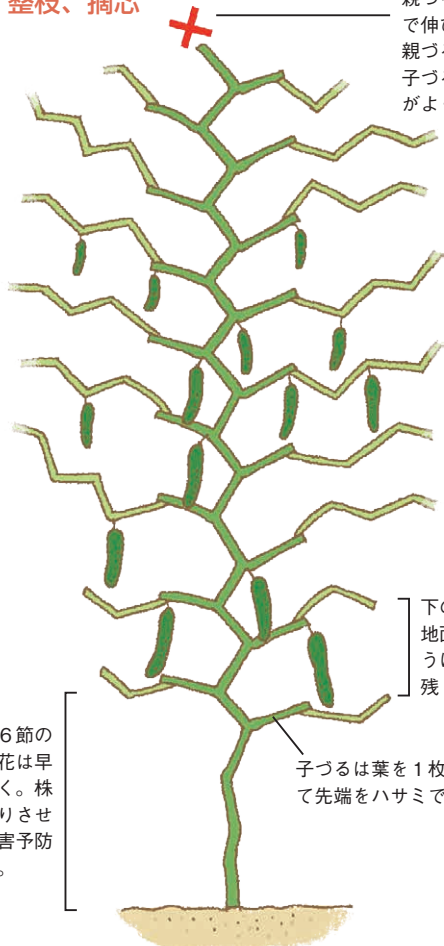
5 整枝、摘芯、摘葉 (図4、図5)

草丈が伸びてきたら、株元から5〜6節までの子づると雌花は早めに取り除き、株の生育を促します。常に株元をすっきりとさせることで、病害の発生を防ぐことができます。

親づるは、支柱の高さまで伸びたら先端を切り取ります。この時期の栽培は、子づるや孫づるが旺盛に伸び過繁茂になりやすいので、子づるは葉を1枚残して早めに摘み取ります。孫づるは基本的に放任し、地面についたり、隣の株と重なったりしたら摘芯します。すべてのつるを摘芯すると生育が悪くなるので、勢いのあるつるを1株当たり3〜4本残します。

病気予防のため、枯れた下葉や黄色くなった葉はこまめに取り除きます。

図5 整枝、摘芯



親づるは支柱の高さまで伸びたら先端を切る。親づるを切ることで、子づる、孫づるの発生がよくなる。

下の方の孫づるは、地面につかないように葉を1〜2枚残して先端を切る。

子づるは葉を1枚残して先端をハサミで切る。

子づるから伸びる孫づるは基本的に放任でOK。隣の株と重なる場合は適宜切り取るが、1株につき3〜4本のつるは切らずに残す。

下から5〜6節の子づると雌花は早めに取り除く。株元をすっきりさせることで病害予防につながる。

6 追肥、敷きわら

追肥は、最初の実を収穫するところから1週間に1回、1㎡当たり30〜50gの化成肥料を通路の部分に施します。追肥は雨の前に行つと、効き目が早く現れるので効率的です。収穫最盛期は水やりを兼ねて、液体肥料を与えるのも草勢維持に役立ちます。キュウリは乾燥を嫌つたため、通路にわらや防草シートを敷き、乾燥時はたっぷり水を与えます。

7 収穫

夏の暑い時期は、通常サイズより小さめで収穫し、株の負担を減らします。早め早めの収穫が、長く楽しむポイントです。夜温が高い時期は実が早く大きくなるので、こまめに見回って収穫しましょう。